

弘法大師像

空海（774-835）は、弘法大師としても知られており、9世紀初頭に密教の秘伝を学ぶために遣唐使の一員として中国を訪れた僧であった。日本に戻ったとき、貴族・庶民にも分け隔てなくその教えを注目され、最終的にそれが浸透し、真言密教として定着した。

空海は、824年に東寺の別当となり、この寺院を彼の新しい真言密教の道場にした。空海はルネッサンスの男であった。旅行と教育に加えて、彼は寺院を建設し、公共事業プロジェクトを指揮し、日本で最も有名な書道家として知られている。

この像は1233年に佛師の巨匠であった康正（生没年不詳）によって彫刻された。康正の作品は京都の多くの寺院に残っている。彼は運慶（1150-1223）という名高い佛師の息子であった。これは現存する最古の空海像であり、2000年に国宝に指定された。